

造形って楽しいな2 - 「表現する力を養い、 創造性を豊かにする大学での講義に視点をあてた研究」

保田 恵 莉

要旨：現代社会は子どもの楽しい心の育みを徐々に衰退させている。少子化、核家族化等、社会の変化は幼児の生活にも影響を及ぼしており、子どもが直接「見て、感じて、考える」体験する機会が少なくなっていることから、人間関係の構築や共感・感動を通じた豊かな心の育成等に関する課題も見られる。また、子どもは、意欲的で積極的な半面、受け身で指示待ちの言動も見られ、主体性の弱さがその姿に現われている。このような状況や子どもを巡る課題を踏まえ、本大学児童福祉学科の保育内容「造形」では、保育士を志望する学生には講義で経験した内容がそのまま実習で生かせるような工夫をしている。大学の講義で学んだ意義を基本にして子ども達を豊かに育てていこうとする人間育成を図りたい。そのために、まずは、本研究のテーマ「造形って楽しいな」という気持ちを大切にしたい。自己の講義に視点をあて、テーマをもとに研究を進めていった。

キーワード：造形表現、創造性、学生の育ち、子ども、楽しい心

Summary: In the modern society the development of children's cheerful feeling is gradually declined. The change of society (for example, a low birth rate and nuclear family tendency) affects children's lives. Since the opportunity decreases that children directly "see, feel, and think", some children have problem in constructing human relationship and enriching their minds through sympathy and impression. Children are often in passive manner and lose sight of their own identities, as well as they are eager and positive. Based on this situation and problem, in the program "handicraft art" of our university, a student who wants to be a childcare person can make use of the contents which is carried out in the class. An ideal way to cultivate a rich humanity is that childcare is carried out on the basis of the class. The study focuses on our class which values the feeling like "a handicraft is enjoyable", and the research is advanced.

Key word : the expression in handicraft, creativity, the growth of students, children, cheerful feeling

I. はじめに

「造形って楽しいな1」では、地域の取り組みとして、「造形ワークショップにおける子ども間の関係性」について追究した。個々の造形ワークショップの体験から自然発生的に生まれる造る喜びと、場に守られるべき人権、年齢差のある子ども間の相互の関係性に及ぼす影響について明らかにすることをねらいとした。このような先行研究を踏まえ、「造形って楽しいな2」では、「子どもの輝く瞳と表

現の喜びに弾む心を養いたい」と考え、本研究では特に「表現する力」・「創造性を豊かにする活動」の育てに視点をあて、大学での授業内容を見直すことにした。

近年、学生の様も変わりつつある。保育内容「造形」の講義では、受け身で表現する力が不足している学生の姿も見られる。生活や学びの基盤となる表現力や創造性を豊かにするために実践力ある学生を社会に送り出すためには、どのような講義の内容を工夫していくべきか……。

2009年4月から2014年8月現在まで、上記の

テーマに取り組みをもつ日本保育学会の「保育内容(表現研究)」に取り組む教員4名(幼児教育学専攻者)・同ねらいにおいて京丹後市保育士委員会「保育内容検討会」に所属する教師3名を対象とするプロジェクト委員会を年3回設定し、地域の子育てセンター研修室及び大学の研究室等で2時間程度のディスカッションを行った。2年次からは特に感性や表現力を培う視点から日々の保育環境の構成や、保育士のかかわり方の見直しも含めて行った。授業に関するだけでなく、地域における課題検討・教材化の探索……あわせて、教室内だけでなく、戸外に出かけての感動体験を通し、感性を磨き、表現意欲を高める工夫等、また、言葉に親しむ生活を構築し、学生が絵本や紙芝居に親しむ機会を設定するなど、「表現する力」・「創造性を豊かにする活動」を育てるための手立てや実践結果を検討し合った。今年度の研究内容としては、2014年4月から2014年7月までの実践(保育内容「造形」の講義及び保育)を持ち寄り、「表現する力を養い、創造性を豊かにするためにどのような講義の内容が適しているか」について、研修室に具体的な資料を持ち寄り、発表→質疑→検討→反省→構築の段階を踏み、研究員同士が共に学んだ。

オットー・フリードリッヒ・ボルノウ(Otto Friedrich Bollnow,1903~1991)が指摘するように「教育の前提には包まれ譲られた温かい雰囲気が必要である¹⁾」。そのような善い環境に恵まれ、心揺さぶられた経験は心に残り、ため込まれ、共通のイメージをもって、言葉や身体で伝え合い、様々な表現活動や遊びに生かされている。体験から身近な人に自分の感じたことを伝えようとするためには、周囲の支えと多様な体験が有効なことがわかるものの、近年は望ましい環境が整わず、また、体験不足の子どもや学生が思いがけず多く存在し、一人ひとりの発達に寄り添うには困難を感じる。しかし、「ひと、ものへの豊かなかかわりをいかに創り出すか」という共通の研究観点を持ち、それぞれの研究員が自分の講義を見直すことで「豊かな感性・表現力を生きる力に繋げる教育活動の創造」の視点が少しずつ広がっていったことも確かである。

本研究では、「造形遊び」の基礎的理解をしなが

ら、保育内容「造形」の講義は、保育士養成のための感性・創造性を培うためにどのような活動が造形活動として有効であるかどうかを考察する。

II. 造形遊びとその意義

秋田喜代美は、幼児期の教育の価値は「幼児一人ひとりにとって意味ある幸せな時間を生きることである。人生のかけがえのないひと時としての幼児期にしかできない経験を保障することの中にあると感じている²⁾」と述べている。造形遊びは、単に子ども達の自由な遊びではなく、造形に関わる遊びを通して人間形成を目標としている。そして、保育者は一人ひとりの子どもの心の内奥の動きが読み取れる専門家として、遊びの中に見えないものを見出す感性、聴こえないものを聴きだす感性を持たなければならないのである。造形遊びの意義を明らかにするために、このことは講義の中で繰り返し伝えて来た。

活動の目的は「遊ぶこと」であるが、自由に材料や用具・場所や空間などに子どもが働き掛け、造形的な思考を働かせながら、造形表現活動の基盤となる経験を期待することができる。そのためには結果的な作品よりも、その活動自体に価値があり、造形表現活動からは自然発生的な「楽しい心」が芽生えるものである。特別に美や技術にこだわることなく、もの造りの能力を用いて十分遊べる活動を用意するとよい。こうした活動の中で、学生も子どもと同じように、積んだり、くっつけたり、組み合わせたり、絵を描いたりしながら造形の基本的なものを身につけていくのである。全身を使った活動 造形遊びの内容には、土、砂、木などの自然ものや新聞、画用紙、空き缶などの人工もの、絵の具や筆などの身近な材料や用具を使った「材料をもとにした遊び」が幾つも見えてくる。他に場所や空間へ挑んでいく「場所や空間でのあそび」、ものを並べたり積んだり組み立てたりする「構成を楽しむあそび」、線を引く、手や道具を使うことを主とした「操作を楽しむあそび」などもある。

これらの造形的なあそびは、単に手先だけの活動ではなく、体全体を用いて材料や用具、場所や空

間に挑んでいくので、造形あそびの第一のポイントは「全身を使って思いのまま造形活動を楽しむ」ことにある。そのためにはまずあそび方を理解させ、身近な環境に積極的に働きかけさせて、自由な発想で活動させることが大切となることに気付かせたい。信頼感、安定感を基盤として、感動体験、感性、表現意欲を大切にしたい保育実践を積み上げ、実践的な研究を通して、豊かに感じ、楽しく表現する力を培う活動を探求することが造形遊びの価値を理解できることに繋がっていく。新鮮で、計画的な環境との出あわせ方・家庭、地域の教育力の取り入れ方と感動を共有する人々とのかわり方からは、豊かな感性が養われる。また、多様な表現に広がる素材の扱い方・個々に応じるかわり方の工夫や思いを素直に表出できにくい幼児へのかわり方を学ぶことは学生そのものを育てることである。そして、心情や言葉が豊かになる方法や具体的に場の工夫・地域につながる話の活用と表現の工夫につながる援助の工夫を取得することが保育内容「造形」の講義では技術だけに留まらず、準備・片付けを含め、学生自身を人間として育てる重要なポイントになることが予想される。

Ⅱ-1 造形活動と子どもを取り巻く育ちの変化

造形活動に着目されない時代が現代であると言われる陰には、都市化・近代化に伴う生活スタイルの変化や地域社会の崩壊等が考えられる。更に核家族化・少子化の進行は、親の子育てや子どもの生活にも影響を与えた。自由で安全な遊び場、群れて遊ぶ仲間、子ども組や伝統行事といった地域の社会的装置を失った子どもたちは、友だち同士かわり育ち合う関係が持てなくなったのではないか。「遊ばない」、「遊べない」、「遊びを知らない」といった子どもが増え、その一方では、今日のメディアやものの豊かさを反映して、子どもは、テレビやビデオを見たりゲームソフトで遊んだり、キャラクターグッズなどの出来上がったおもちゃで遊ぶ生活が多くなってきた。そうした過程で、子どもの主体性の欠如・情緒の不安定さ、運動能力の低下、コミュニケーション能力の低下や社会性の未熟さ等、正常な発達を欠く心配な子どもの姿

が見られるようになってきたと推察される。

また、子どもを取り巻く育ちに一番かかわりを持つ親の方も、従来、伝統的な生活の知恵や地域に伝承されてきた育児文化などを地域のかかわりを通じて見聞きする機会や、モデルとなる子育て経験者に出会う機会が少なくなった。それ以前に思うことは、最近では、公園に出かけても、木々を愛おしそうに見つめる親の姿が見られなくなってきた。そして、子どもとのかかわり方や遊び方、躰の仕方がわからず不安を感じながら育児書片手に奮闘し、子どもが自分の思うように育たないと自信を失い、その自信のなさを改善する手立ても見出せないまま、孤独な日々を送らせざるをえない状況におかれている。そうしたなかで、子育てによる鬱や、子どもの虐待、最終的には親子心中など最悪な事態になるケースも見られるようになってきている。

このように、今日の社会は、核家族化・少子化によって、「子どもも親も仲間と呼べる人がいない」、「地域で子どもを遊ばせる場が少ない」、「子育てや子育てに関する情報が上手く得られない」、「援助を頼めるような近隣の人間関係も得られない」等、子育てにおける家庭や地域の育ての力が低下している。そして、そうした親子への社会的援助や支援が今日の社会的課題となっている。この根本的問題の渦中には、「造形活動の楽しさ」等、遠い世界のことにように思われる。しかし、こういった社会情勢の中に生きる子どもにとって、「空が広い」、「花が美しい」、「木々から陽がさしている」等、当たり前のようで感じられなくなっている事柄を生活の中に意識づけていくことが何より重要である。

子どもは共同体の次世代の担い手として必要であり、社会的に期待されていた昔には、「子どもをよりよく育てる」ということは親の基本的な願いであった。子どもを産み育てることは親の生き甲斐であり、次世代を育成する意味でも重要な役割と考えられていた。親の子育てや子どもの成長への援助は地域の人々の協力のもとで行われ、親としての役割もそこで意識化され共通認識されて果たされてきたのである。

しかし、今日では、子どもを持つことは親の人生の選択であり、親の人生の充実感を高める一つの

出来事と考えられるようになってきた。子どもは自分の人生設計の中で存在していくものであり、子育ても自分たちの意向で自分たちの子育てを楽しむという人が増えている。子育てもするが、自己実現もし、「子どもに頼らず人生を過ごしたい」と考える人が多くなり、子どもに対する思いも変わってきた。子どもは思いやりがあって優しい、みんなと仲良くできる子どもに育ててほしいと願う気持ちに変わりはないが、能力面への期待が大きく、早くから自立を求める親が増えている。早期からの子どもの教育や稽古事、受験等、子どもを育てる意味や育ちの方向性が限定され、目先のことに一喜一憂する傾向も見られる。

そこで、大人側はこれら子どもの育ちの変化に対応し、もの造りの経験価値を振り返らなければならぬと考えるのである。

II-2 「造る喜びを引き出す造形活動」と、感じる力・かかわる力

子ども達は日々成長し、一日毎に前に歩みだしている。子どもを導く保育者は目まぐるしく移り変わるその「一日」を大切に、子どもと一緒に「感動体験」を持たなければならない。それら幾つかの感動は、乳幼児期・児童期の子どもの年齢によっても異なるものである。それぞれの子どもの発達段階を踏まえてその時期の子どもが示す発達の姿（体験の喜び）を子どもの姿から学ぶ必要がある。幼い子どもに残す心の財産としては、どのような小さなことにでも美しいものを見つけたら感動する、柔らかな気持ちを失わないように育てられたらと願うが、母親の就労増加に伴い、子どもが児童文化と出会い、感動体験より様々なスキルを習得する場面が年々減少傾向にある。ノーベル化学賞を受賞された福井謙一博士の著書『学問の創造』を読むと、子ども時代の自然の中の遊びについて書いておられる部分があって、興味をそえられる。博士のお母さんの実家は奈良の農村にあり、長期の休みには直ちに実家の方に行くのが常だった。そして、朝から晩まで昆虫を追いかけ、珍しい鉱ものをさがし、魚釣りに行き、時にはおじいさんといっしょに山菜を取りに山に入りという風に、泥んこになって自然の中を駆け回って

たようだ。博士は自分の長い研究生生活を振り返り、次のように書いている。「……幸いにして多くのよき師、よき友、よき書にめぐり逢い、かけがえない情報を受け取ってきた。私はまた、論理的にもの事を考える力を、曲りなりにも伸ばそうと努めてきた。その二つのことは、化学の道に第一歩を踏んだその日から今日まで、私の仕事の大半を占めた、とあってよい³⁾」。ここでは、直観力の他に、感受性、感動力、情操などをふくめた感性、つまり感じる力の重要性を指摘しておきたい。知識が大事なほうというまでもないが、それは感性と相補って働かなければ、現実にはほとんど有効に機能しないことである。創造性はもちろんのこと、子どもの遊びや文化の提唱も同様に、それら感性を身につけるのは、文字を通してではなく、繰り返し体験し、実ものに手に取り、遊び、母親の膝の上で聴き取るもの語のイメージを心の内側にため込んでおける環境によるものである。園での造形活動では、母に変わる保育者の深い愛情の行き交う関係性から「造る喜び」を得、後の人間へと成長する間に語り継がれるものである。園や家庭は、一面では文化環境であり、どのようなところでも文化的な設備のないところはない。子どもたちは園や家庭においての文化財に接している内に、知らず知らずの内に文化を受容し、それを創造する芽を培っていくものであろう。これらのことを講義の中に取り入れ、学生に話すことで、造形活動が創造の過程になぜ喜びを引き出していくのかを伝達理解していくように努めた。

III. 「造形遊びの魅力を知り、表現できる学生をめざして—講義での造形表現活動から—

ここでは、筆者の今年度4月から7月（前期授業）の中でのプロジェクトの中から特に表現・創造性の視点から「学生の育ちが見えた」90分の講義について選抜し、テーマに寄り添い考察する。いずれのテーマ（題材）も、造形遊びの魅力を知り、思ったことや感じたことを心や体で素直に表現できる学生をめざしている。（以下、記載上学生A・学生Bなどの「学生」は省略して明記する）

Ⅲ-1 テーマ「フィンガーペインティング」対象 年齢「2歳・3歳」

【実施日・時間】平成26年5月13日・18:00~19:30

【場所】花園大学拈花館「図画工作室」

【受講人数】二回生39名

【○ねらい・経験する内容】

- 絵の具のぬるぬるした感触を楽しむ。
- 手指を使って遊び、開放感や気持ちの安定感をもつ。
- ・好きな色を選んで使い、紙いっぱいにくたくたり混ぜたりして友達と一緒に遊ぶ。
- ・「こいのぼり」の模様が発展させる等、バリエーションを楽しむ。

【準備・環境づくり（各テーブルに7名から8名が着く）】

- ・テーブルにビニールクロスを敷き、汚れてもよいようにする。（新聞紙よりもビニールクロスの方がすべりがよい。後片付けも楽である。）
- ・材料：小麦粉、絵の具、食紅カラー（緑・赤・黄色・桃色・青色）、洗剤少々『①水と小麦粉4対1の割合で混ぜる。②カスタード状まで弱火で混ぜる。③火から下ろして食紅カラーと粉石けんを少量入れておく（汚れが落ちやすいため）。④よく練る。』はけやローラーも準備する。

【遊び方とプロセス】

- ・濡らした紙に材料を載せて遊ぶ。アート紙の様な吸水性の弱い紙を使うとのびがよい。
- ・ビニールクロスの上で選択した絵の具等を混ぜたりのぼしたり広げたりして遊ぶ。

【援助のポイント】

- ①対象年齢が低い場合（ここでは3歳児を対象とした）は、口に入れないようにしっかりと指導を行う。また、色も「食紅」等、万が一口に入れても安全なものを使用することを覚えておく。（ここでの遊びには「絵の具」も使用する）
- ②服装は、汚れてもよいものを着用すること。のびのびと遊べるように配慮する。

【バリエーション】

- ①丹後の節句（6月5日）「こいのぼり」の体に

手形遊びとする。

- ②暑い時期は、裸になって遊び、ボディーペインティングに発展させる。

【活動の様子】

絵の具を準備している筆者に、講義を受ける者の多くは「赤がいい」「水入れてこようか」「早く遊びたい」と、興味をもって見たり手伝ったりした。初めての経験に抵抗があるAは、皆と離れた場から遊びの様子を見ていた。やってみたくいけれど、きっかけがないのだと思い、絵の具と食紅カラー等材料の置かれた場に誘い、筆者がやって見せた。

しばらくすると、人が描いたものを手のひらで消すことを喜び、それを繰り返して楽しんだ。その後、自分でも手指でペインティングし出した。指で感触を味わったり「これ何に見えるかな？」と言ったりしながら、楽しそうに一緒に遊ぶ姿が見られた。はけやローラーを使って、大きい紙に思いのままにかいて、道や線路に見立て、手にカラーの色をつけて楽しんだ。次第に大胆に表現しようとする姿が見られるようにAが変化してきた。「山だよ！」と隣にいる友達が絵を描き始めると、Aも一緒に描き出した。しばらくして「先生、見て」というAに応じて見に行くと、手形が紙に一つ二つきれいについていた。しかし、Aの側に来て「花が咲いたみたいに見えるよ」と言うBに返事もせず、Aは場を立ち去ってしまった。

数分して画面を見ると、Aの手形の側に違う色の手形が無数についていた。BもCもDも、いつの間にか自然に集まり、手形遊びを楽しんでいた。よく見ると、Aの手形のブルーの色がまた一つ増えていた。

【プロジェクト委員会での考察】

- 伸び伸びとした表現ができるように、ダイナミックに遊べるような材料や表現の場を工夫することで、興味をもって取り組み様々な表現を楽しむことができる。
- 色をペインティングしたものを何かに見立てて遊んだり、偶然にできた模様からイメージを広げたりする姿がみられる。学生も「子どもの気持ち」、「子どもになって」講義を受けることが必要である。そこから様々な気付き

が生まれる。

○教師の近くにいることで安定して遊び、自分らしさを出しかけているAのような学生には、個別の教師のかかわりが必要である。教師がしていることに興味をもったり、楽しんでしている遊びを一緒に真似てやってみたくなったりする学生も多くなってきている。ここでの実践からは、教師が感性やイメージを豊かにもつことと、自由感のある遊びを創造し、投げかけていくこと大切だと感じる。

○造形遊びは、知らず知らずの内に「仲間作り」をするものである。

III-2 テーマ「泥団子作り」対象年齢「4歳・5歳」

【実施日・時間】平成26年6月22日・16:20~17:50

【場所】京都市右京区「右京ふれあい文化会館前広場」

【参加人数】二回生38名

【○ねらい・経験する内容】

○友達と一緒に試したり、考えたり、工夫しながら遊びに取り組む。

○心を動かしたり豊かに感じたりする体験ができるように、環境の構成を工夫する。

・土や砂や泥を混ぜて、割れない固い泥団子造りにチャレンジする。

・自然ものと充分にかかわり、気付いたことを伝えあったり、不思議に思ったり、共感したりする。

【準備・環境づくり】

・汚れてもよい服装に着替える。・草木に触れるので短いスカートなどの着用はしない。

・陽にあたるので、帽子を準備する。・歩きやすい靴を準備する。

・材料：泥土・砂（車に積んで広場に運ぶ）、木の葉、バケツ、足ふき用のバスタオル3枚、濡れたタオル5枚程度、ビニール袋（泥団子の持ち帰り用）、プリンカップ、スコップ

【遊び方とプロセス】

・泥土や砂を混ぜたり、叩いたり、丸めたりして十分に自然素材に触れる。広場にある土や砂を集めて泥団子に混ぜてもおもしろい。

・友達と一緒に試し「誰の泥団子が一番固く出来

たか」等、競争しても楽しい。

・水は、広場内に水道があるので、バケツに汲んでそれぞれの泥土に少しずつ混ぜて「土作り」の工夫をする。

【援助のポイント】

①「どうしたら固い泥団子ができるか」を試行錯誤できるように、一緒に丸めて造ったり、考え合ったり、アドバイスをしたりする。

②一生懸命遊ぶ中にも、人に泥をつけたりしないように心配りができるように話す。

③手はきれいに洗うようにする。順番に洗ったり、待たたりすることも大切であることを伝える。

【バリエーション】

①木の葉や木の実をプリンカップに集めて、一緒に使うと楽しい造形作品が出来上がる。

②広い場なので空間を上手に利用して遊び、並んだり、くっつけたりし、泥団子を並べて見せ合うようにする。

③終わりの会で「泥団子の紹介」などすると互いの作品の認め合いが出来、作り上げた満足感が得られる。

【活動の様子（テーマを探求するねらいから現地に着くまでの様子も記述する）】

「さあ、出発！」広場に向かって道を歩いて行くと、道路脇の木々が増え薄暗くなった。「わあー、森みたい」「絵本に出てくるみたいやな……」と、学生達は感じたことをそれぞれに言葉で表す。感じ方や表現の仕方は様々だ。「あっ、鳥の巣箱がある」「犬みたいな形の雲が見える」と友達や筆者が言うと「ほんとうだ。白犬みたいに見えるなあ！」と、普段の講義では声を聴いたことがないAも答える。自然の不思議さや美しさには思わず声が出てしまうようで、その度、足を止め、周りの景色に目と心に向けていた。少し歩くと「まだかな？」とBが言う。それに対し、道を知っているBは「あと300メートル」と言う。やりとりを聞いて学生達は納得したように歩き出す。言葉のやりとりだけでもこんなにも頑張る気持ちにつながるのだと感じた。戸外に出かけての講義は初めてのことで、筆者も心配だったが、気がつくと明るく素直な二回生から勇気を得ていた。「着いたよ！バン

ザーイ！」ゆっくり歩いて約30分後、広場に到着した。「ヤッター！」なぜだか達成と共に言ってみたくなる言葉。友達と気持ちを合わせてお腹から喜び会う心地よさ、様々な経験が一人ひとりの心を揺さぶり、この日の「講義が心に残る体験」となることに目標を定めた。現地に着くと、先に運んでいた泥土や砂を砂場に下ろし、バケツやスコップを置いて自主的に活動できるよう促したが、初めの10分程は落ち着かない様子であったため、まずは広場の探索をして遊ぶことにした。カラスのエンドウ豆を見つけて笛にして鳴らしたり、椿の葉を集めたり、数珠の実を見つけたりして自然の中を動き回って皆で楽しんだ。その後、砂場に集合し、筆者が数日前に作った「泥団子」を学生に見せると「わーっ、まん丸ーだ」「早く造りたい！」と、関心を深め、数人のグループになり造り出した。「どこにいるのか？」講義の時には一人になりがちのAが気になったため意識して探すと、細かいレールの窪みのところに友達と肩を並べ、泥団子作りを夢中になって造り出していた。

固い泥団子を作るには、水と土の配分が難しい。サラサラの砂をまぶしては、また泥土を重ねていく、少し湿かしてから再度丸めていく等、「われてしまうという失敗」を何度か繰り返すことで「コツ」を自分達でつかんでいった様子が伺えた。



(Fig 1: 造った泥団子)

【プロジェクト委員会での考察】

- 近年、「土・砂に触るという体験」が不足しているため抵抗感を感じる学生もいるようだ。指導者が率先して遊び、感触の心地よさや楽しさを伝えるように心掛けることが必要である。
- 講義室とは違う自然の中での体験は、Aも心が開放され、自然に言葉を発し、感じたことや身近な感動を伝えたい気持ちにもなれたであろう。ここでの実践から、素朴な自然の遊びの中から造形（もの造り）を共有体験する価値を再確認した。
- 園外活動の体験「造る喜び」が今後の生活の中で、思いを伝え合う楽しさにつながっていくと考える。
- 一人ひとりの感じ方や表現の仕方を受け止め、豊かな感情（感動体験）ができるような「もの・こと・人」との出会わせ方を考え、講義に取り入れていくようにする。

IV. 創造性を培う感性と造形表現の「楽しさ」

ここでは、プロジェクト委員会にて討議された事柄を取り上げ、子どものこころを育てるための保育内容としての理解を深める。「子どもの感性が表れている」と評価された作品を事例として紹介し、創造性を促した要因について考察する。

IV-1 もの語に展開した絵「牛さんとぼく（わたし）」から「感じるこころ」が伝わる。『4歳児』

「子どもの絵画研究」におけるプロジェクト委員会は、年一度開かれている。描画の得意な研究員が半数いることもあり、いろいろなパターンの描画作品を持ち寄り、保育実習に行った時、学生も直接子ども達に絵画指導ができるように「導入法」なども含め研修する。

大学講義の中では「創造性を培う子どもの感性・絵画指導の一考察」として、プレゼンテーションにて授業展開した。(2014年7月15日)

【プロジェクト委員会での考察】

・ Fig 2 の絵は、筆者が、「兵庫県城崎こども園」に絵画指導に出かけ、4歳児一クラスの半数12名を対象に指導した作品である。ここでは、京丹後市久美浜町甲山付近にあるミルク牧場「そら」で飼育されている牛について話し、その話を題材にして子ども達と描いた。

ここでの描画では、4歳児の特徴「イメージを伝え合い、表現する楽しさを味わう」・「友達と刺激し合いながら、自分の世界を広げる」という2点に着目した。子どもは、「白い牛だけでなく、黒いたくましい牛もある」ことや「子牛が可愛く父母の牛を慕っている」ことをもの語にして伝えると自分のイメージから「一緒にご飯を食べている」・「一緒に散歩に出かけたよ」など、楽しそうに眩きながら絵を描き始めていた。プロジェクト委員会では「もの語を創作する」という研究員の姿勢を評価し、「お話づくりの楽しさ」を様々な表現を用いて、「子どものありのままの感性」を表していくべきと結論付けた。

・ Fig 3 の絵は、同じく4歳児の作品同プロジェクト研究員が附属幼稚園にて指導し、描いたものである。主に「絵本」を扱い、牛の優しさや親子の愛情のある様子を絵本の中から子ども達を読み取り、共感したことを表現している。近年、子ども達の道徳心が低下し、円滑な対人関係を営む能力が育まれていないという問題が社会的に指摘されている⁴⁾。ここには、「子

育ての上で重要視される「親子関係」につき、絵本を通じて絵に表現させる中から子どもの優しい心情を養う」という研究員のねらいがあった。

プロジェクト委員会では「道徳性を養う」という面では、表現に期待することは難しいのではないか……。まずは個々の道徳的な発達を把握し、ベースラインである子どもの発達を理解（アセスメント）することが大切である、と結論付けた。もちろん、「夢のある絵画表現」・草をいっぱい食べて甘い美味しいお乳を出そうとしているお母さん牛の絵は高く評価されている。

IV-2 素材を生かした表現—セメントに釘でひっかけ、舟を表す—

ここでの造形表現は、筆者が隔年で小学校・中学校に指導している題材である。セメントの素材は流し込んでから濁くまでに時間を要する。半日の自然遊びと「セット授業」で展開している。釘は五寸釘のようなしっかりしたものを扱うことにする。Fig 4 は、小学校二年生の児童が感性豊かに表した作品の一部である。セメントの全面が画用紙のように想定され、この場面は「海」と創造している。周囲の友達とかかわらず、一人で黙々と最後まで描いていた。プロジェクト委員会ではこの作品の「真剣さ」に着目し、話合いがなされた。「遊びながら創作する」という造形遊びが多い中だが、このように集中して「自己の世界に浸る」と



Fig 2 : お父さんとお散歩しているね
実践・2014年6月11日



Fig 3 : お母さん、甘いお乳ちょうだい
実践・2014年6月11日

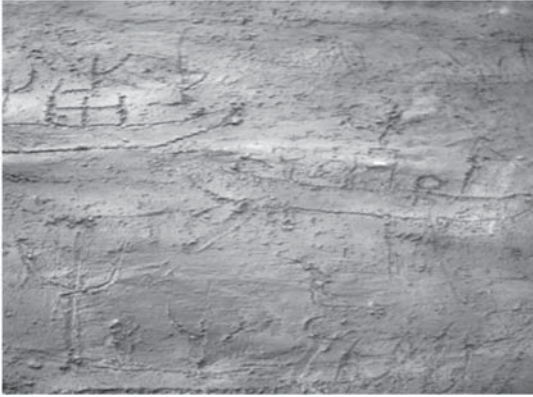


Fig 4：舟に乗って海の探検に出かけているよ。実践・2012年7月25日

いう子どもの姿は「価値あるもの」と結論付けた。

活動に際しては、砂やセメントに対してのアレルギーの子どもがいるので個別によく観察し、事前聴き取りをおこない「注意すること」も重要であると確認し合った。

V. 造形遊びによる課題

研究成果としては、素直に感じることを、素直に表現することを楽しむ学生が多くなったことが挙げられる。自分の言葉でしっかり話し、相手（先生・友達・身近な人）の話をよく聞く様子が見られるようになった。「もの造り」に関しては、まず「造る手順」や「方法」、「実際の園での子どもの姿」なども含め、「人の話を聞く」ということが重要である。それらのことに気付く学生は常に前向きであり、講義で学ぶ実技を実習に出かけた園（現場）で実践している。反対に講義を行う教室の机の配置が「向かい合える」ようになっていたことを動機として話を聞かない学生の姿も見られる。学生同士の結びつきを大切に講義室（図画工作室）の机を対面式に配置されている大学も多いのだが、正面を向いて教員の話を聞かないでいる学生はどうしても「受け身」となり、「その場限り」の実技に終わる傾向にあり、残念ではあるが現場に生かす教育までは行きつかない現状にある。「人の話を聞く」ということは全てにかかわり重要な事項であり、学生の人格をも育てていくものと捉

える。

また、造形活動では、自由な活動であることから作品として形にならないことや残しておけないものもある。しかし、「作品を最後まで仕上げたい」という願いを個々の学生が持っていることも事実である。製作に取り組む姿勢と、限られた時間内に新しい道具に慣れ造形作品に対する達成感を味わうことも、これから造形活動を行っていくうえで大切なことである。以下、具体的な問題意識を追究する。

V-I 小学校図画工作科学習指導要領改訂以降の造形遊び

第一回幼稚園教育要領の改定の時期と同じく、1999年5月より高学年まで「造形遊び」を取り扱うことになった。これまで行われてきた造形活動が、活動内容や活動方法を教師によって指定されてから取り組まれる傾向があり、子ども主体の活動とは言い難いところがあったことが要因である。主体的に造形にかかわろうとする態度を取り戻すために、学びを子どもたちに委ねなければならぬ「造形遊び」を文部省は高学年まで取り入れたと推察する。そもそも遊びは心と体を一つにしてものかかる全身的なものである。そこでは子どもの生き生きとした姿が見ることができる。それを生み出しているものが遊びの持つ「自由さ」である。この遊びが持つ「自由さ」を生かした学びを学習指導要領の改訂において取り入れようとしているということは、子どもたちの活動にその自由さがなくなっているかと判断される。「造形遊び」の楽しさは「自由さ」にある。造形活動だけでなく図画工作では、この「自由さ」を保障していかなければならない。

V-2 保育内容「造形」の講義と向き合う教師

実際の講義の中では、「何をどうしてよいのか分からない学生」がいる。造形遊びでは「学習とのけじめが分からない学生」に対する悩みを教員は少なからず持っている。それというのも「学生主体」の「自由感」を「放任」と履き違えてしまいやすいからである。あくまでも学生が自由に造形活動を行う中で造形感覚や造形性を引き出し、造形活動

を楽しむようにすることが求められているが、そのためには教師が美術に対して専門的な知識や技術を確かに持たなければならない。しかし、プロジェクト委員会での討議では、「教師にも得手・不得手がある」ということも話し合われた。不得意な分野に出会う場合、造形活動に対し確信が持てず、具体的な支援のあり方や造形活動（製作の質）を説明する場面があると自分自身が不安を抱えてしまう。不得手だから研修や教材研究を行うかというところでもない。指導時数の多いものや教育効果の見えやすいものを行ってしまう傾向が強い。

また、教師は活動において「～しなければならない。」とか「～できるようにしてあげたい。」という思いを強く持つこともある。そして、学生に対して「できるようになると表現することが好きになる」と思い込む。「楽しい」や「嬉しい」という思いは「できる

ようになったので」ということだけではない。学生達は教師に認められたいという思いを誰もが持っている。教師の意図することができて認められて嬉しいというのも大きいであろうし、仲間と活動することが楽しいという場合もあるだろう。できるようになったとしても、好きになったり、生活に応用したりするとは限らないのである。しかし、教師側は活動するのは造形活動の楽しさからと捉えてしまい、できるようにしなければと思いついてしまう場合がある。そのためスキル指導に目がいってしまいがちとなる。さらに、指導時間も限られているので、目に見える形で成果を上げようとスキル指導に終始して、学生から活動や発想の自由を奪い、教師主体の学びを展開してしまうことに陥りやすい。

V-3 造形遊びの実践を通しての変容

ここでは、教師・学生の両者の「変容」を述べる。私自身が造形遊びの実践を行うにあたり行ったことは、幼稚園勤務の時代に子どもを大切に愛し、育てていた「現場での実践を基本にすること」と「活動を学生に委ねる」ことである。「保育内容に生かすようにする」という点では、大学の講義の一年目には切り替えることが難しかったが、一朝一夕にできるわけもないと自分に言い聞かせて

きた。今も焦らず学生達と一緒に学ぶつもりで取り組んでいる。新しいことを取り入れる時は不安も大きいですが、素直に「造形って楽しいな」と声にして言ってくれる学生の姿が見られる。

実践を通して感じたことは、「教師が相手の心に寄り添うことが必要」ということである。寄り添うことで安心して活動できるのである。寄り添うとはどのような活動（表現）でも認めていくことである。そして、認めていくためには学生理解が欠かせない。自由な活動を認めていくと初めの数分間は友達や教師の関心を引こうと突拍子もない表現をする学生も出てくる。自分の存在をアピールするために皆の注目を引こうとする学生が毎年のように出現する。しかし、落ち着きのない学生には、「そうしなければならない理由」が必ずある。その思いの全てを受け入れ認めていくようにすると、学生は「自分を認めてくれる」という気持ちになり造形活動そのものに集中するようになってしまう。不思議なことに次第に関心を引こうとすることが減り、自分の思いを素直に表現するようになってくる。さらに言うならば、造形遊びで一番重要な仕事は、題材（材料・場所）を決めることである。いろいろな材料や活動場所との出会いから受ける刺激によって、活動への取り組み姿勢が異なってくるからである。

造形遊びを実践していくと、学生は幅のある活動をするようになる。授業に対して構えることがなくなり、造形活動にかかわろうとする態度や表現に自分レベルで取り組もうとしてくる。つまり、作品や活動に対する気負いが消え、活動そのものを楽しむようになるのである。そのため表現に領域がなくなったり、学校生活のちょっとしたところに造形遊びでしたことを応用したりしているところを見ることもある。和紙の染めで「絞り染め」を表したときのことである。出来上がりが濁くと和紙を手でちぎり初め、別の画用紙に「海の中の生きもの」を表現して遊べた。発展的に表す活動に夢中になる学生が出てきた。このような活動が自然発生的に生まれる造形遊びは一人ひとりが自ら試行錯誤し、自ら決め、自ら活動しなければならない。「主体的に活動する」とは、仕組まれていない未知の世界のことでもある。また、造形遊び

のよさは、個々のレベルで活動ができることにある。型にはまらない気付きや発見を生むことがある。教師の予想しないような新しい展開を引き起こしたりもする。同時に、材料や活動場所への働きかけだけでなく、友達への働き掛けも活発になる。活動や材料・活動場所などから受ける感動や刺激によって、自分にとってより感動のするものを追求する学習スタイルを学生自身が身に付けていってほしい。

「一人ひとり異なる学び」、「自分のできる学び」を構築していくように見守ることも必要である。

VI. 総合的考察

造形遊びでは出来るだけ自分で見つけた学びを展開している。それ故、学生も造形活動が好きになり、更にのびのびと活動するようになる。講義を通して味わった感覚や思いは一人ひとりの内面深く自然に入っていく。その時に直ぐに表れなくても、経験した感動や心に焼き付いた思いは、後日別な形となって表れてくることもある。このような可能性を秘めている活動であることを重要視したいと考える。

保育内容という扱いの講義からは、経験の広がりや活動を活動として取り入れることや園外保育に出かけて体験を通して経験することなど、ものや人との出会いをその時の実態や願いに応じて豊かに大切に展開されるようになってきた。また、講義を回数受けていく過程においては「環境の問い直し」がなされるようになった。変化する環境に出会い遊びを経験する子ども達の心持ちと丁寧にかかわることの大切さに気付き、「子どもの心を動かす環境とは……」、「新鮮に感じるための題材の出会い方はどうなのか……」など、環境の見直しが出来ようになったからである。

VII. 結論

造形は、人間が心豊かに暮らすために様々な美的要素、造形原理を学び、多様な造形活動を通じて感性、創造性、発想力などを育成するとともに、自分の在り方を考え、将来への自己確立、人間形成

をしていくために必要なものである。目に見える美的造形的な存在だけでなく、自然やものの美しさを感じ、捉え、考えていく態度、そこから得る感動や考え、美しさを求めようとする心、先人たちが残した文化遺産、全て人間の意思があって生まれるものである。内発的な刺激や外発的な刺激をもとに、動機づけられ、個人があるいは集団で創ろうとする、自分や他とかかわろうとする主体的な意思から生まれてきたのである。しかし、現代社会の様々な場面において、人間が本来もっている力（人間がもつ資質・能力）が、弱まってきていると指摘されるようになった。自己をプロデュースし、自己実現のために様々な能力を育成することが強く求められるようになったのも「自分探し」にあえぎ、自分づくりの力が困難な人間が増えてきたからであろう。豊かで便利になりすぎた社会の陰で、「自分で自分を考え」、「他者を見て自分を考え」、「互いに理解し合うこと」などの方法論さえ求められるようになったことは、嘆かわしいことである。

そして、教育においては、自ら学び、自ら考える力、主体的に判断する力、感動する心、豊かな人間性の育成など、生きる力の育成を目標に、教師はこの社会に主体的に生きるための人間の資質・能力をいかに育て、高めていくかを見通し、日々実践し、共に歩んでいる。このように、一人ひとりが将来を生きていくための様々な力を身に体験を通して豊かな感情と表現する力を培っていく考えは、新幼稚園教育要領への移行期にあってもさらに重要な面である。

プロジェクト委員会にて研究員7名が共通に研究できた財産を糧に、取り組んできた内容を浸透させつつ、更に研修を続けていくことが今後の課題である。

注

- 1) オットー・フリードリッヒ・ボルノウ (Otto Friedrich Bollnow) 著、森昭翻訳・岡田渥美翻訳 (2006) 「教育を支えるもの」黎明書房 pp.117-125
- 2) 秋田喜代美 (2013) 「論説 幼児期の教育の真価」『幼稚園じほう』全国国立幼稚園長会 p.11
- 3) 藤本浩之輔 (1987) 「幼稚園教育大全『第4巻』感性を育む遊びと環境」pp.46-58

造形って楽しいな2 - 「表現する力を養い、創造性を豊かにする大学での講義に視点をあてた研究」

- 4) 渡辺弥生 (2011) 「絵本で育てる思いやり - 発達理論に基づいた教育実践 -」野間教育研究所 p.15

- ・ヨーゼフ・ガントナー (著) 中村二柄 (訳) (1983) 「心のイメージ - 美術における未完成の問題」玉川大学
・アンリ・ホシヨン (著) 杉本秀太郎 (訳) (1969) 「形の生命」岩波書店
・京都市立芸術大学美術教育研究会編 (1994) 「美術教材事典」日本文教出版

参考文献

- ・財団法人幼小年教育研究所 (編) (2012) 『新版 遊びの指導「乳・幼児編」』同分書院
・鯨岡峻 (2011) 「子どもは育てられ育つ」慶應義塾大学出版会
・松村陽子・松村進・東山明 (2014) 「目指せ！図工の達人 - 基礎・基本をおさえた絵の指導のコツ」

明治図書

- ・東山明 (2005) 「絵画・製作・造形あそび指導百科 - 表現活動を豊かにする -」ひかりのくに
・松村陽子・東山明 (2004) 「基礎・基本をおさえた絵の指導 - 絵画・版画・切り絵編 -」明治図書
・名須川知子 (2004) 「唱歌遊戯作品における身体表現の変遷」風間書房
・山野てるひ・岡林典子・應木朗 (2013) 『感性をひらいて保育力アップ！「表現エクササイズ」なるほど基礎知識』明治図書
・東山明監修・浅野卓司・竹井史・山野てるひ編 (2012) 「幼児の造形ニューヒット教材集①絵画・造形あそび編」明治図書
・東山明監修・浅野卓司・竹井史・山野てるひ編 (2012) 「幼児の造形ニューヒット教材集②立体造形・手作りおもちゃ編」明治図書
・鈴木幹雄・長谷哲哉 (2012) 「子どもの心に語りかける表現教育」あいり書房
・花篤寛・竹内博・東山明編著 (1994) 「美術教育の理念と創造」黎明書房
・岡本夏生 (2005) 「幼児期 - 子どもは世界をどうつかむか -」岩波書店
・中央教育審議会 (2005) 「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」・「子どもの最善の利益のために幼児教育を考える (答申)」
・出口拓彦 (2009) 第9章 「規範意識と社会的迷惑 - 授業中の私語 -」社会的迷惑の心理学 pp.135-146
・太田賀月恵 (2008) 保育実習における「学び」と「気づき」による保育士像の形成 - 保育科学生の学び・気づきの原点、将来像、目指す保育士像」環太平洋大学研究紀要 第1号 pp.93-101
・青木善治 (2010) 「考える力・表現する力・かかわり合う力を育て、自己肯定感を育む図画工作」
・伊藤崇 (2012) 「教育実践へのアプリケーション」・「状況と活動の心理学コンセプト・方法・活動」新曜社 pp.171-185
・ヨーゼフ・ガントナー (著) 梅津忠雄 (訳) (1966) 「ロダントとミケランジェロ」昭森社

謝辞

本稿の編集においてご指導いただきましたプロジェクト委員会会長浜上玉恵先生に深く感謝申し上げます。また、資料 (子どもの絵) を提供していただきました兵庫县城崎こども園西垣浩文園長様に心より御礼申し上げます。